リレートーク #171

紹介者
高乗 正行
チップワンストップ
取締役社長

グローバル人材の決め手

加瀬 豊
双日
取締役社長

リレートークのお話をチップワンストップ社長の高乗さんから頂いた。弱冠31歳で電子部品・半導体の通販サイト会社、チップワンストップを立ち上げた高乗さんも米国シリコンバレーの駐在時に多くの刺激を受けたようだと見ている。

今年8月、久しぶりにシリコンバレーを訪ねた。IT企業の一社を訪問したのだが、言わずと知れたアップルの街でもある。創業者のスティーブ・ジョブス氏は"Stay hungry, Stay foolish"という創造力の原点ともいうべき言葉を残して、この秋早世した。しかしながらGoogleをはじめまだまだ数多くの企業、世界中から集まった個人、起業家がシリコンバレーで、未来の技術、アイデアの創造に取り組んでいる。

シリコンバレーからオレゴン州ポートランドに飛んでナイキを訪問し、フィル・ナイト会長とお会いした。ナイキと双日が仕事を始めてはや40年ということで、ナイキキャンパスで、40周年記念の植樹をナイト会長と一緒に行った。ナイキもアップルも会社のことをキャンパスと呼び、広大なキャンパスの中にいくつものオフィスを構えている。自由な雰囲気の中で社員の個性、独創性を大いに発揮できる環境となっている。ナイト会長も、ナイキは運動靴やアパレルの製造会社ではなく、スポーツをはじめとした人間工学のデザイン会社というコンセプトで経営していると言っていた。

お隣りのワシントン州ベルビューやシアトルには、マイクロソフト、アマゾン・ドット・コム、スターバックス等々、世界のライフスタイルを変えたそうそうたる企業が目白押しだ。このようにアメリカの片田舎（と言っては失礼か）から世界の文化や社会生活を変えていく企業が輩出されるのを見ていると、グローバルな展開や市場へのアプローチは、そのロケーションではなく、個々人の頭の中のキャンバスにどれだけ豊かな発想で絵を描けるかにかかっていると思われる。

グローバル人材になるために、海外での経験は、いろいろな人種・民族から刺激を受け、理解を深めるという点では重要だが、結局は自分の頭の中にある絵がグローバルかどうかということが、グローバル人材になる決め手ではないかと思う。

次回リレートーク：菅野 健一（リスクモンスター 代表取締役CEO）